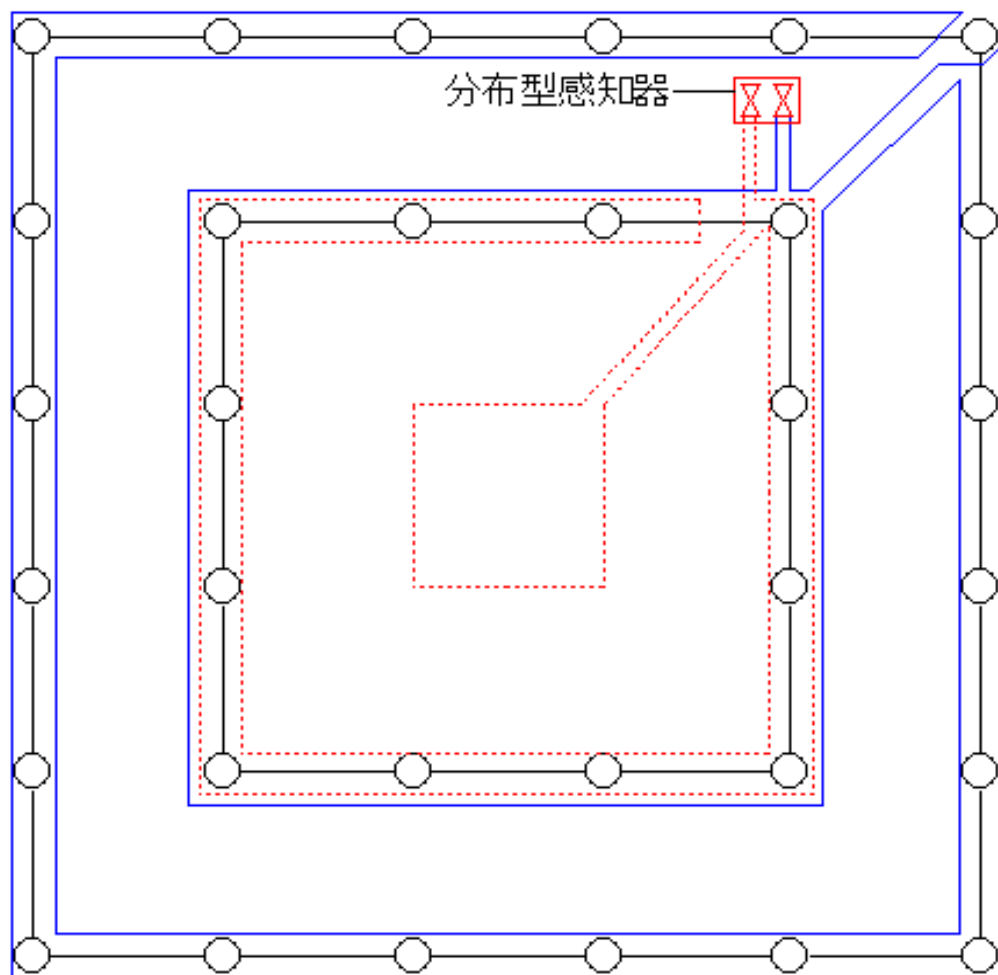


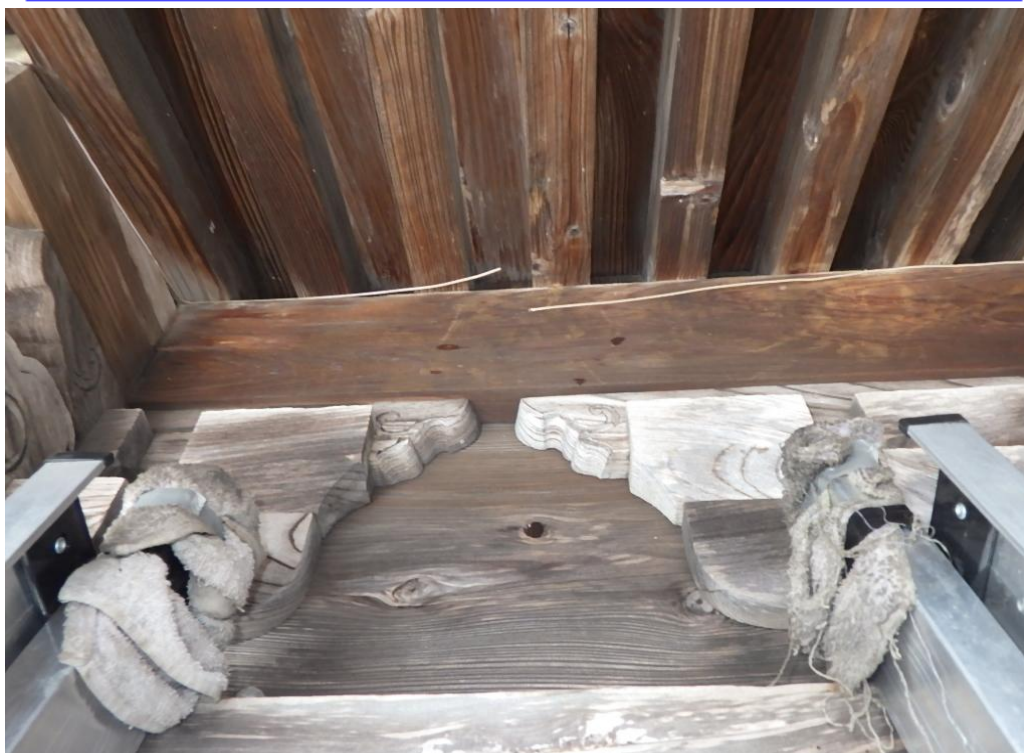
- 建物(御堂)
- 床下空気管
- 屋根周り及び軒下空気管



※イメージ図です。実際の施工場所の図面ではございません。参考としてご覧ください。

左の図のように床下の梁の外側と内側、屋根の軒下と外側と銅管を張り巡らすため、それぞれ50～100m程度の長さになります。

空気管は最大100mまでと法律で決まっているため、感知器が2台になります。



空気管を切り離れた画像になります。

竣工図面を参考に半分の付近で切断してどちら側の銅管が悪いのか調べます。

張替えの施工性を考え、広くスペースをとれる場所で切り離しました。



左図赤丸部分に亀裂があります。50～100mあるなかで1mm程度の穴を見つけるのは、大変です。それも目立たないように建物の境目に沿って張っていますし、今回は軒下なので脚立やはしごを使用して少しずつ場所を変えながら目視で探します。完全に切れてたりすれば分かりやすいのですが、経年劣化でこういった状態になります。



ステップル(空気を固定する釘のような物)を外して延ばすとこんな感じでした。亀裂が2箇所あります。経年劣化による錆の腐食で穴が開いたと思われます。屋外なので環境の影響が大きいので仕方ないと思います。40年経っているのもった方でしょう。



文化財を傷つけないように慎重にステップルを抜いていきます。
取り付けの時より抜く方が大変です。なぜならば壁や天井の境目の角にステップルでしっかり固定してあるので、抜く方が力を使います。



既設一部取り外し後。



こちらが空気管とステップルになります。
ステップルで等間隔(0.35m以内)に取り付けていきます。
ステップルも空気管に合わせて塗装済みです。



張替え後。施工中の作業はお見せできません。ご了承ください。
銅管は暖かい時期になると伸びるため、自作の専用の道具を使いながら引っ張った状態でステップルに止めていきます。そうしないと時間が経てば銅管が伸びてぐにゃぐにゃになり見栄えがとても悪くなります。
業者の良し悪しを見分けるポイントの一つになります。



空気を張った後は既存の銅管と新しい銅管の間に接続金具(スリーブ)を使って半田で仕上げて完了です。左の図ははんだで仕上げた後の塗装も完了しています。



最後に試験を実施して、問題なく作動することを確認して終了です。